



YouTube連動

木彫り看板職人

卓越した技により、印刷にはない生きた文字を刻む「木彫り看板」
半世紀にわたり「書」を追求する合資会社木と字の神林で、
日々鍛錬に励む若き職人の看板との出会いを追った

木彫り看板には 魂が宿る

木と字の神林 樋口慧

1985年、福岡県北九州市生まれ。多摩美術大学造形表現学部卒。木の看板に惚れ込み、木と字の神林で修行を始める。現在、同社で技術の継承者として工具をふるいつつ、木彫り看板の新しい可能性を探求し、InstagramなどのSNSを通じた情報配信にも力を入れている。



天職との出会い

東京都町田市つくし野の一角にある工房で、ノミの柄頭を槌で叩くリズムミカルな音が響く。クランプで作業台に固定された板材と向き合い、書家の筆運びをなぞるように工具をふるうのは、木彫職人・樋口慧さんだ。「木製看板には魂が宿る。気持ちを込めて彫っていくことで彫師の個性が木材に刻まれる」。

書の筆運びや“かすれ”を彫りの強弱によって再現し、筆文字の温かみはもとより情緒さえも写し出す木彫り看板の世界。木の形状や一つひとつ異なる木目を生かした一点ものの作品は、いわば生きた芸術品のようなのだ。

樋口さんが木の看板に惚れ込み、木彫職人を志したのは、東日本大震災が発生した2011年3月。多くの人の生

死を別けた未曾有の大災害は、真剣に「生きる道」を考えるきっかけになったという。

それ以前は、多摩美術大学造形表現学部を卒業した後、あざみ野駅（東急田園都市線）近くの焼き鳥屋でアルバイトをしながら、もともと好きなモノづくりを仕事にしたいと思いつつも、無為な日々を過ごしていた。

バイト生活に鬱々とした気持ちにな

匠の矜持

—木彫り看板編—



墨がたくさんのった部分や強調したい箇所は深く、細く勢いがある線表現したい時は浅く彫る。強弱、彫りの深さを変えることで、より字が生きたものとなる



彩色の工程。下塗り後に文字の部分細かいやすりで磨き、塗料を入れていく。マスキングはせず、全て手で淵を取りながら色を入れる

り、仕事終わりにふと店を振り返った時、見慣れていたはずの木彫り看板を「いいな」と素直に思えた。ある日、「うちの看板を作った人が来ているよ」と店長から声をかけられた。その看板の彫師こそ、木と字の神林の社長・神林隆成さんだった。

神林社長とはすぐに意気投合し、「工房へ遊びにこないか」と気さくに誘われた。樋口さんは工房に度々足を運ぶようになり、最初は職人たちの作業を見ているだけだったが、3カ月ほど

たった頃から、徐々に仕事も手伝うようになったという。

最初に覚えたのは、やすりがけ。ノミや彫刻刀で彫った文字を紙やすりで整えていく。力を込めた指には血が滲んだが、複雑な形状の文字を美しく仕上げるには、均一な機械作業よりも繊細な手作業でなければ表現できない。

社長の兄である神林金哉会長やその夫人に見守られながら、やがて彩色や彫刻にも挑戦していった。その面白さに、樋口さんは自然とのめり込んで

いった。バイトと掛け持ちしながらの修行の日々が続いた。

木彫りの継承者

現在では木の素材選定からデザイン、加工、彫刻、やすりがけ、彩色と一通りの作業をすべて1人でこなすまでに成長した樋口さん。

だが、「職人が一人前かどうかは、お客さんが評価すること。まだまだ勉強中」と樋口さんは口にする。神林社長も「看板を作ること自体は、看板屋



「お客様が驚く看板を」というオーナーからの意向を受け、栃木県から取り寄せた珍しいケヤキの根っこ材で作られた。樋口さんが職人を志すきっかけになった一品だ (2100×800×80mm)



秋田県産の銘木、秋田杉から作られたかまぼこ彫りの看板。杉材は、木目が美しく軽量で耐久性にも優れる。一方で柔らかすぎて端が割れやすく、彫刻には技術が必要な素材である (2100×700×55mm、35kg)



アサメ材の看板。かまぼこ彫り、V字彫り、線彫り、浮かし彫り、うろこ彫りなど、要素ごとに彫り方を変えることで、平面な看板にリズムが生まれ、一つの立体的な絵としても楽しめる看板に仕上げた (1600×700×55mm)

の仕事の3分の1ほどでしかない。経営者として一人前になるまでに期待することはたくさんある」と言葉をつなげた。

樋口さんは将来の夢を「木と字の神林は、半世紀にわたって“字”を売り続けてきたユニークな会社。技術の継承者として自分の色を出しつつ、伝統を受け継ぎ、木彫りを続けていきたい」と語る。

縁で繋がった木彫り看板の会社と技は、これからも絶えず続いていく。